

小学校生き方探究教育のさらなる充実を求めて

—自己実現をめざして、よりよく判断する力を育てる教科学習の実際—

井上 拓哉

生き方探究教育のさらなる充実のためには、この教育を「特別な教育」と見る一面的な見方から脱却する必要がある。そのためには、日々行われている「教科学習」で、この教育の視点を踏まえた実践を行い、その意義や方法を、多くの指導者の中で共有していくことが求められる。

本研究では、国語科・算数科・理科における生き方探究教育の実践授業を行い、検証した上で、「生き方探究教育の視点を踏まえた教科学習」のモデル例を提示することとした。また、子どもたちの成長を支援するものとして「振り返りカード」を作成し、授業で活用した。実践授業の中で、自己実現をめざして課題解決に向かう子どもたちの姿を報告するとともに、この教育の視点を踏まえた学習活動や支援の在り方を提示する。

第1章 「教科学習」で生き方探究教育を実践する意義

第1節 求められる「教科学習」での実践

本研究で行ったアンケート調査の結果や、国立教育政策研究所の報告書の内容を見ると、この教育が、特に教科学習において、十分に浸透していない現状が見えてくる。学習指導要領の中で、教科の目標の解説に示されている、「学習の見通しをもつ」「学習したことを振り返る」「学習課題や活動を選択する」「自らの将来について考える」「生活や学習で学んだことを、進んで活用しようとする態度を育てる」などの内容から、この教育の実践は、教科の目標の達成にも有効であるといえる。

第2節 教科学習と5領域の力との関連

教科学習で生き方探究教育を実践する際に、この教育で育てたい5領域17の力と教科の目標との関連を見ていくことが必要である。

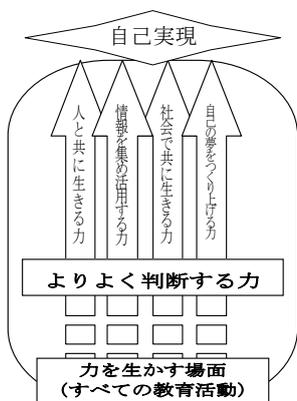


図1 自己実現をめざして、身につけた力を発揮している図

また、教科学習で生き方探究教育の実践を進めていくためには、5領域を育む視点から学習活動を考え、授業の中に採り入れていくことが大切である。

第2章 教科学習で取り組むための具体的な方法

第1節 単元の指導計画案と本時の学習指導案の作成

単元の指導計画案については、単元目標の下に「単元目標と生き方探究教育との関連」という枠を設定し、単元と5領域の力との関わりを示した。

本時の学習指導案については、どの教科でも、学習展開を、「課題設定」「課題解決」「振り返り」の三つの学習場面で示すこととした。また、生き方探究教育の視点を踏まえた学習活動には、下線を引いて強調した。更に、相談活動が必要な場面には、どのような相談活動が有効であるかを考え、支援・留意点の欄に具体的に示している。

生き方探究教育の評価については、教科の目標に準拠した「評価の視点」に、5領域の力に関わる文言を加味することによって、5領域の力と教科の目標との一体化を図った。

第2節 各学習場面で大切にしたい学習活動と振り返りカードについて

教科学習での実践を進める上で、各学習場面でのどのような学習活動を設定すればよいかということ、具体的に提示することが必要であると考えた。そこで、「課題設定の場面」「課題解決の場面」「振り返りの場面」という三つの学習場面で、大切にしたいポイントをまとめた。

また、本研究では、児童の自己実現を支援するために「振り返りカード」を活用した。更に、教科や学習に対する児童の思いを把握するために、事前にアンケート調査を行い、振り返りカードを分析する際に参照した。振り返りカードを見れば、子どもたちの成長の足跡や、学習に対する困りが一度に見渡せるように、記入欄の配置など、その様式を工夫した。

第3章 生き方探究教育の視点を踏まえた教科学習の実際

第1節 教科学習のモデル例

第5学年で算数科，第4学年で算数科と理科，第2学年で国語科の実践を行った。



図2 試験管の色水のかさをならす活動

第5学年算数科「ならした大きさ(平均)」の実践では，“平均の算出方法”と，3本の試験管に入っている色水を“ならす”という体験とを結び

つけて考えるという活動を設定した。また，単元の終わりには，発展的な学習として，自分の歩幅の平均を出し，その値を利用して距離を測るという活動を採り入れた。これらの活動に取り組むことにより，子どもたちは学習したことと生活とのつながりを実感することができた。

第4学年算数科「はしたの大きさの表し方を考えよう(小数)」の実践では，自分の習熟に合わせて自ら課題を選択し，主体的に学習する活動を二回設定した。一回目は，練習問題に取り組む時間に行った。子どもたちは，問題の種類別に用意されたプリントの中から，自分が苦手とするものを選択し，主体的に取り組むとともに，習熟を深めることができた。授業後，「自分の苦手な問題がわかってよかったです。とても力になったように思いました。」という感想が見られた。

二回目は，単元の最後に，小数に関する課題コースを選択し，課題解決に向けて主体的に学習する時間として設定した。子どもたちは選択の根拠を明らかにしながら取り組むコースを決めることで，目的意識をもって意欲的に学習に向かうことができた。

第4学年理科「とじこめた空気や水をおしてみよう」の実践では，子どもたち自らが，実験の内容や方法を選択しながら課題解決に向かうという時間を設定した。空気でっぽうをつくる時間には，筒に詰める栓の種類を様々に変えて，どの栓がよく飛ぶのかを予想した上で，一人一人が試しながら明らかにしていく実験を行った。自己決定の機会を活動に採り入れることにより，子どもたちは，試行錯誤を繰り返しながら主体的に課題解決に向かうことができた。

単元の終わりには，グループごとに実験を選択し，自分たちで実験方法を考えながら解決に向かう時間を設定した。子どもたちはグループで相談して決めた方法で実験を進め，役割分担しながら意欲的に課題に取り組むことができた。

第2学年国語科「だいじなところに 気をつけて読もう『サンゴの海の生きものたち』」の実践では，読み手を意識しながら図鑑づくりに取り組んだ。子どもたちに相手意識をもたせるため，事前に担任以外の指導者から，「学校のみんなが楽しめるような生き物図鑑をつくってください。」という「作成依頼」をしてもらった。子どもたちは依頼を受ける形で作成を始めることとなった。そのことにより，「一年生でも読めるように，漢字にふりがなを打つ。」というような，読み手を意識した自己目標を立てて作成に向かうことができた。

第2節 振り返りカードの分析と活用

本実践で活用した「振り返りカード」は，大きく二つの目的がある。一つは，指導者が子どもたちの学習状況を把握し，今後の授業の進め方や指導方法に工夫・改善を加えるという目的である。もう一つは，子どもたちが自分の学習状況を振り返り，自己実現に向けての成長を自ら確認することで，次のステップへ進む支援として活用するという目的である。本実践を通して，子どもたちの感想の記述から，振り返りカードの有効性を実感することができた。

第4章 生き方探究教育のこれからの展望

第1節 研究の成果と課題

成果としては，生き方探究教育の視点を踏まえた活動を教科学習に採り入れることにより，学習意欲の高まりにつながったことが挙げられる。

課題としては，振り返りカードを日常的に活用する際，その活用頻度や生かし方の検証が，十分にできなかったことが挙げられる。また，生き方探究教育で育てたい力と教科の目標との関連や，評価方法については，今後も，実践を重ねながら考えていく必要があると感じた。

第2節 さらに充実を求めて

生き方探究教育を更に充実させるためには，一人一人の指導者が，身近な教育活動の中でこの教育に取り組み，実践を重ねることが大切である。同時に，地域や他校種と連携したダイナミックな教育活動を展開するために，学校体制の中核に位置づけて実践することも重要である。このような，「個としての推進」と「組織としての推進」という二つの推進の在り方が両輪となって機能することにより，この教育は更に充実していくと考える。

生き方探究教育を実践することは，子どもたちの主体性を引き出し，キャリア発達をうながす，よりよい支援につながると考える。